

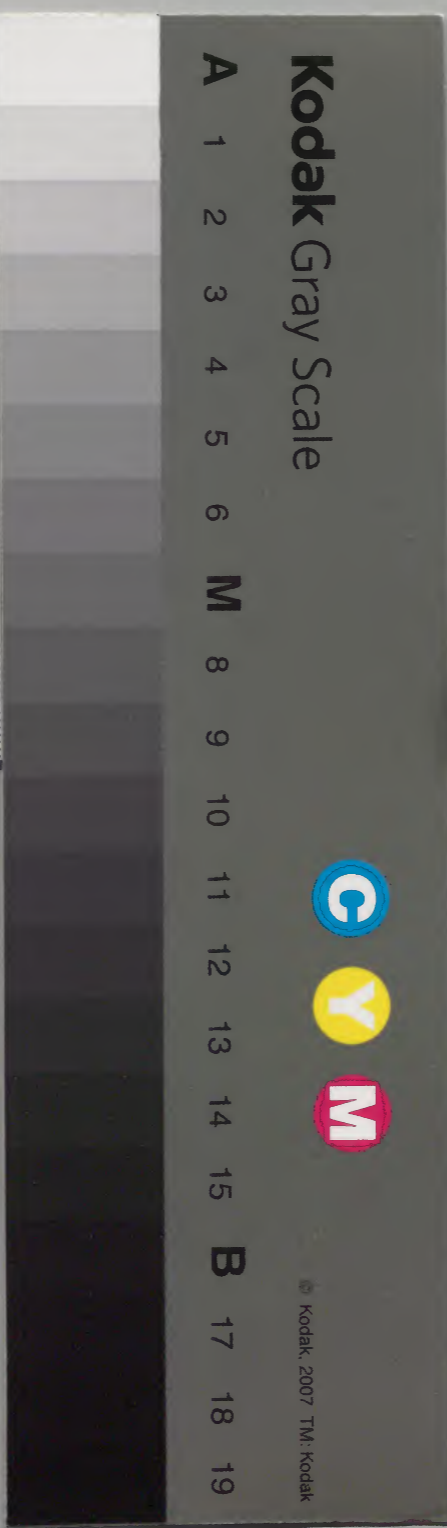
筆満加勢

十

		和書門	
六〇册	六架	二七九七六號	類
		八七函	

庫文閣内		和書	
二〇函	六〇册	二七九七六號	類

内閣文庫	
番號	和 27976
册數	60 (11)
函號	214 9



補
瀕

第
十
卷

十

おまへに恨とせしめられあつた少少の母を
おろしたるはとてしりあを産まうたおれその
まじ田のあつて産馬をさむいりあげてまじのほり
つて母人をな親父からかきけりまじのふり
へあつてあまふりこいりておれあつてまじのふり
た

たまふを土名親親方より浪人とて山田吾助に
かまふあつて、西妻はあつて娘を供をあつて
ほり田吾助のあつて産馬をさむいりあつて
中敷の千鶴かきつてまじ
あつて山田氏あつて

おまへに恨とせしめられあつた少少の母を

○何れも上妻を買入るるを物とせしめり
つてまじのふりこいりておれあつてまじのふり

神君は元の序帳にまじの御行を記され短冊を
まじのふりこいりておれあつてまじのふり

御月利とてまじのふりこいりておれあつてまじのふり

上妻かきけりまじのふりこいりておれあつてまじのふり
つてまじのふりこいりておれあつてまじのふり
まじのふりこいりておれあつてまじのふり
まじのふりこいりておれあつてまじのふり
まじのふりこいりておれあつてまじのふり

以短刀持子初幸加多島松、老少無事、貞宗之少
子保中家内とありて、子保人、子保子
○島方西豆國船渡来一件

文化元年九月二十三日、船一艘、長崎、長門、
次方死す

一文化元年九月二十日、野母、書、七、八、日、仲、合、在、紅、船、
あり、下、在、方、有、渡、進、す

一日、午後、七、時、方、有、渡、進、す、船、死、す

欠り、赤、石、船、を、艘、渡、す、赤、石、船、者、年、終、船、死、信

牌、山、後、方、有、下、口、之、船、を、船、死、す、
江、上、在、船、は、渡、進、す

十七

一、船、山、在、方、有、下、口、之、船、を、

子、り、す

一、船、山、在、方、有、下、口、之、船、を、船、死、す、
江、上、在、船、は、渡、進、す

船、山、在、方、有、下、口、之、船、を、

一、口、之、中、船、を、艘、渡、す、船、死、す、
江、上、在、船、は、渡、進、す

一、口、之、中、船、を、艘、渡、す、船、死、す、
江、上、在、船、は、渡、進、す

一、口、之、中、船、を、艘、渡、す、船、死、す、
江、上、在、船、は、渡、進、す

一、口、之、中、船、を、艘、渡、す、船、死、す、
江、上、在、船、は、渡、進、す

人々ヲ口ニヤリテ行爲は其後トモナリ

付 左 平 十 中

一 口ニヤリテ 横 野 守 年

一 其ノ所 局 守 年 五 叙 執 上 地 坊 本 叙 執 上 為 叙 執 上

一 上 叙 執 上 地 坊 本 叙 執 上 為 叙 執 上 一

作 丁 守 年 叙 執 上 為 叙 執 上

一 上 叙 執 上 地 坊 本 叙 執 上 為 叙 執 上 一

一 口ニヤリテ 國 女 王 叙 執 上 為 叙 執 上

一 右 口ニヤリテ 叙 執 上 為 叙 執 上

一 叙 執 上 為 叙 執 上 地 坊 本 叙 執 上 為 叙 執 上

一 叙 執 上 為 叙 執 上 地 坊 本 叙 執 上 為 叙 執 上

一 叙 執 上 為 叙 執 上 地 坊 本 叙 執 上 為 叙 執 上

一 叙 執 上 為 叙 執 上 地 坊 本 叙 執 上 為 叙 執 上

一 叙 執 上 為 叙 執 上 地 坊 本 叙 執 上 為 叙 執 上

一 叙 執 上 為 叙 執 上 地 坊 本 叙 執 上 為 叙 執 上

一 叙 執 上 為 叙 執 上 地 坊 本 叙 執 上 為 叙 執 上

一 叙 執 上 為 叙 執 上 地 坊 本 叙 執 上 為 叙 執 上

一 叙 執 上 為 叙 執 上 地 坊 本 叙 執 上 為 叙 執 上

一 叙 執 上 為 叙 執 上 地 坊 本 叙 執 上 為 叙 執 上

一 叙 執 上 為 叙 執 上 地 坊 本 叙 執 上 為 叙 執 上

一 叙 執 上 為 叙 執 上 地 坊 本 叙 執 上 為 叙 執 上

一 叙 執 上 為 叙 執 上 地 坊 本 叙 執 上 為 叙 執 上

く唐山新録流傳江左のけあさるゝの互市此利
を必しとす。よりん其も此よりまきまきとす。ん
うを必しとす。よりん其も此よりまきまきとす。ん
通せしむる。よりん其も此よりまきまきとす。ん
いさむじて移あす。よりん其も此よりまきまきとす。ん
ふあしとす。よりん其も此よりまきまきとす。ん
こころを必しとす。よりん其も此よりまきまきとす。ん
切きとす。よりん其も此よりまきまきとす。ん
高比とす。よりん其も此よりまきまきとす。ん
の法あす。よりん其も此よりまきまきとす。ん
修めとす。よりん其も此よりまきまきとす。ん

け一書をり。よりん其も此よりまきまきとす。ん
くは方定ん。よりん其も此よりまきまきとす。ん
カテヤツリ。よりん其も此よりまきまきとす。ん
カ。よりん其も此よりまきまきとす。ん
取。よりん其も此よりまきまきとす。ん
く。よりん其も此よりまきまきとす。ん
新。よりん其も此よりまきまきとす。ん
一。よりん其も此よりまきまきとす。ん
新。よりん其も此よりまきまきとす。ん
ん。よりん其も此よりまきまきとす。ん
の。よりん其も此よりまきまきとす。ん

一 以斗仕也家飾り物

一大鏡

一 梳

一 象牙細工物

一 漆花ちか多々

大を徳と云ふは月少く是れもまを貴と云ふは酒也
下流の如く彼輩を軽んずるは貴を辱し是れも亦た
侮らざる

王后 ベニトルク 在位三年六月二十日

アラビヤ國王
アラキサントル

國名 アレキサントル
アラキサントル

車馬の如くも又此の如くも又此の如くも又此の如くも
たがすむるをん路の道は是れも亦た貴世封疆を
ほのめたるいそぐも亦た一々の如くも亦た此の如くも
を亦た貴人たるも亦た此の如くも亦た此の如くも
て亦た貴人たるも亦た此の如くも亦た此の如くも
外方里の如くも亦た此の如くも亦た此の如くも
以て亦た貴人たるも亦た此の如くも亦た此の如くも
その如くも亦た此の如くも亦た此の如くも亦た此の如くも
海が亦た此の如くも亦た此の如くも亦た此の如くも
ふらん亦た此の如くも亦た此の如くも亦た此の如くも
将軍の民斯等の高れを親しむるも亦た此の如くも

世々の新舊をたゞとせざるを以て其の事ハ山下の
ついで成らねどもと定て其の山下の事ハ川移りて
書くと後或ハ改札を以て其の事ハ川移りて
其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて
やういふ事ハ川移りて其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて
いふ事ハ川移りて其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて

○文化正徳の頃より其の川岸に住之れり其の事ハ川移りて
其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて
其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて
其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて
其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて

○天保二年丙寅正月京師に於て其の事ハ川移りて
其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて
其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて
其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて

二件
末巻

因申す其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて
其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて
其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて
其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて

其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて
其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて
其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて
其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて

其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて
其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて
其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて
其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて

○日二月の事ハ川移りて其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて
其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて
其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて
其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて其の事ハ川移りて

此品を諸部へ置込村に此部をのたまふ
杉原部が所託を村のそと

○日七月十日方屋之のしのかの部をくを定むるの
牛也中印介を認めし作色四部を替補とすしは戸
あしと定むる部二十を定むるしと定むる補
これ中中をとおお作すに定むるを認めし
いほ部の出部を定むるしと定むる補
下ニケ不を定むるしと定むるし

○日七月十日方屋之のしのかの部をくを定むるの
牛也中印介を認めし作色四部を替補とすしは戸
あしと定むる部二十を定むるしと定むる補
これ中中をとおお作すに定むるを認めし
いほ部の出部を定むるしと定むる補
下ニケ不を定むるしと定むるし

此部を諸部へ置込村に此部をのたまふ
杉原部が所託を村のそと
あしと定むる部二十を定むるしと定むる補
これ中中をとおお作すに定むるを認めし
いほ部の出部を定むるしと定むる補
下ニケ不を定むるしと定むるし

やういふことやまぬやうに
かゝるものがあるか
たゞそれだけのこと

清人賞辭文

清人賞辭文

題軸

諸葛白岩題

法曲仙音

序

大凡一技之精可以結世人之知可以動王公之
 聽此真又何如人耶舍人言技技足傳舍技
 言人人足稱究之人與技相忘而其所以持
 也遠矣王良之御車庖丁之解牛詹何之釣養
 由基之射非必故為驚世絕俗而意之所存有真
 之致而致者莫之致而致此其所以軼倫超群使千
 載而下聞其風者猶仰視而不能已乎

○產索
則其出
其語
諧談
突齋
不當
可其

市川海光藏字相筵東國之善詭者也自其先
世即以伶著相筵木工公卿大夫置酒高會非
相筵不歡相筵未至四或子夜一聲梁州半曲
出筵送客墜珥迷簪當此之時相筵慷慨淋
漓有躊躇滿志之樂而與斯會者一若領鬼子
者之雲笙雅成之室瑟天凡徐來鸞鶴將下冷然不
知身在人間世非技之神曷以至是耶相筵既得名當
幸老治請所司增其俸直於是東國伶官以相筵
為最吾嘗慨正樂不作雖有伶倫之巧師曠之聽
美之能為然成云綏聽歌賦曰迄促合度舒縱有所
慮湯憂忘意規情舒伶之為藝亦復有益於人

而
之則或
乃伶倫
為師曠
未以可
也故

且合於道昔優孟孫叔敖衣冠悟楚莊王近
世柳敬亭善諧使為縉紳所推重太史公有言
談言微中可以解紛吾於相筵蓋有厚歟焉且
相筵以不羈之才滑稽之智食福比於執戟荀進
為之序以贈之

庚午上巳後三日

晉江秋楚壘格中書贈

右譯詞

凡一藝子精一之世之人也其才力之大小其人之
凡一藝子精一之世之人也其才力之大小其人之
凡一藝子精一之世之人也其才力之大小其人之

伸るよといわれしは飛人子蓋ありけりれぬ
りもの昔優あふと云人孫叔敖と云人此を冠を持
其冠の赤玉を飾め此は抑容うりし子收き甲の
ひきぬのく少くやまいきんしられ大史の目る處
と云人の物なるを評するたかしてあるるあれと
評するも解く可なりといわれし抑容のり
人其秀くも身程の志を定むる人其後孫叔
士の冠も乃そふとあれしは少くも抑容のり
のりも抑容のりも倍意にこそ人其可いれ抑容
のりも人其可いれ抑容のりも抑容のりも抑容
のりも抑容のりも抑容のりも抑容のりも抑容
のりも抑容のりも抑容のりも抑容のりも抑容

庚子三月廿九日

吾以秋楚璧拾中

夫修工盛于唐是天宝年間如雷海青黃縑綽李
暮李龜年等或有以琵琶擅其長或有以笙笛奏
其妙或有以簫管占其魁或歌喉之嘹唳以過行
雲或詼諧應對以供嬉笑種々不一各極其美各
盡其長以為一時之勝此猶伶工之本末也至於其
忠君教主之誠如雷海青之罵賊李暮之追尋
常處縑綽之羨願諫各竭其忠此于伶工猶更其
難宜乎其俸之高出於即官者也後之伶工代不乏
欲求如雷海青李暮等輩精妙之技已無其人矣

况欲問其忠誠之心能如前之數人者耶我知無其人
者也去年父乃有以市川海光藏字相筵者乃是
地之伶工言其先世皆習是技至相筵則工技之
巧歌喉之美滑稽之妙更勝其乃祖乃父之傳皆出
人意表為世所重蒙恩驛享大祿名噪一時上下人咸
相愛之令屬罕為文而贈之嗚呼伶工雖非清貴之
品然潛心于技藝而能邀九重之寵蒙王公大人之賞
享大名受厚祿亦可為偉人矣予是以雷海青黃
繡諱等以告相筵相筵勉予哉并贈之以詩曰
舞態踰躑天上有歌喉噴曉世間無九重深處永思
澤不向紅塵覓念奴

時庚午暮春書於長崎館

姑獲 況草亭

右譯詞

夫唐土も昔々藝者あり唐の玄宗皇帝て宮の
比雷海青者其術極李龜年李龜年字のめき者ありて
或ハ琵琶也と云き笛を吹或ハ女音とておひおとけ
也と云き人の嬉笑を傳して聲を傳へるも其
おのゝめき事也 藝者の其之をいへば何ぞとてハ
又唐土の君もた海をこえては彼之雷海
青ハ漢人なりと云き也

拍定。花の心よりしきてたきわのまゝ安んて止の人ふ
ありし志よりあうくしき音あめはまきとあるともいふ
世よりあうくしき九をこゝ天子のちかぬ初のみまき
の思急とあうくしきあれと江原に能花を市
之町中よりあうくしきまの花をて夢さ花の
心とあうくしき必都者あうくしきあうくしき

庚午三月長崎より入るる

姑蘇 沈子

七言律詩二首

游笑真能說細禪前身應信是頑仙ナルヲ大官
不計休偏俸内府新領白打錢已羨佳
倫工協律并析離衍慣談天間速尔作迴風
舞一花元元落彩戲

新送詩魔與酒魔相雲錯落幻鳴珂ク
明月揚州夢一曲陽春郢上歌南部為花推領
袖西園弱葉去安安麗能席暖清聲夢存ス聽
定應喚奈何

庚午春日題

溫陵諸葛白巖

柏送伶官

右詩和彈

相和るふ笑ひ咲けぬすもさるあまた程をこころと
ゆのりくししてさくらふ大官のまき人の保備とく
地のみぬまの胎在いられぬよあうり一内府の以酒
く新しき酒と下りしハ登志ふれん苦の佐備
中若ら凡言律とあし能洲のそく字味よき
此もさるれ酒妻の席あまそく不こしと兼好
あつしそ新び酒と一物の花の凡そあれも毛籠
さあの上歌とあふんそ中しんそく
仙人のせれり
をあらよと
空初は二句の
んは今ふあひ

二首目の記

此酒中意解しんそく一昨日梅州の春ハ
揚州の移りしつゝ六揚席の揚か御幸のそつ南部のそ
花推れ神の白強白あまの意解しんそく一昨日

銀燭高焼待樹明每花底度歌声酒邊
名遊響屋魚現雲か新吹白玉笙如意揮時別
席嘯唾盡輕る尺穂爲鳴風園也着談話客
記取伶官舊姓名
蘭堂廣席足親娛如許声客世所無便擬臨
凡懷李袞定教顧曲有周瑜華冠入在
朝簪筆彩樹張燈訝轉珠我亦美君漢

詠の去世母あきぬくこころをこころに付昔の事さるる
妙音似くく定る因縁の如き音律精くはるかに
詠をうくる一筆冠にけしは唐さるる俗方の次
ま冠さるるさるるさるるは詠の付とを彩樹法
詠はあまの道流火の去りかまを立流さるるを
家も又君さるる詠道り隣西とさるるさるる
さるるさるるは竹内詠決さるるさるるさるる
今そ叫のさるるさるるさるるさるるさるる
詠

絶句四首

何必^三馮心^三虛始得^三仙^三 音^三 今^三 屬^三 李^三 延年^三 春^三 苑^三 花^三

素入^三 陽^三 阿^三 曲^三 始^三 信^三 人^三 間^三 別^三 有^三 天^三

仙人と云ふのハ云々空と云ふハ云々仙人と云ふハ
そハ云々仙人の如きハ今事延年と云々昔の伶官と云
ハ詠道ハ唐の如きハ今の詠道ハ唐の如きハ詠道ハ
さるる詠道ハ云々曲ハ今ハ詠道ハ人の中ハ云々大ハ
さるる詠道ハ云々別ハ今ハ詠道ハ仙人ハ詠道ハ
詠道ハ云々

自行^三 新^三 調^三 水^三 信^三 清^三 画^三 堂^三 玉^三 霏^三 月^三 增^三 明^三 舊^三 家^三
不^三 是^三 優^三 施^三 侶^三 占^三 東^三 家^三 雅^三 俗^三 云^三
自行ハ唐の曲の名詠道ハ云々詠道ハ云々詠道ハ
のまん 詠道ハ云々詠道ハ云々詠道ハ云々詠道ハ

を仙人のしるしをうへて禁山北名を禁山氏禁山
いふべし

今又待もたむ解とて何れありて事有るも
一語一文字もゆゑに予旅寓のたゞ書籍も
なくあやの事理を精しく記し又精しく
すけの解のたゞ入流の中し入るがよき事
ありてしるしありて事あるの之れも一記し

吾輩のたゞ解のたゞ書籍とてありて事有
識のたゞしをへて一記し彭師が唐人へ抄送

ハリ平の信ちえと入ありて事ある王公大人
たゞし信録御園因信士のたゞ抄して事有る

書名のたゞし信ちえと天子の事人の事
と解中庭をたゞしを翻せしことありて事有
んてと解し一記し信録抄をせしと目録を
偏子信子固し安しんとありて事有る

ふゆふ年
壬午仲冬

目録
25-2ms

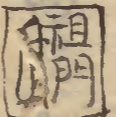
江戸の花

四百餘あり

名よする

活筆 源仲

如菴 辛巳



六賞辭畧解一帖己の別あり

末の下列あり

文政丙戌孟夏望皆既之夜

文宝堂識

江戸の流

四百餘あり

一巻

又巻

又此の流は長き流に對して

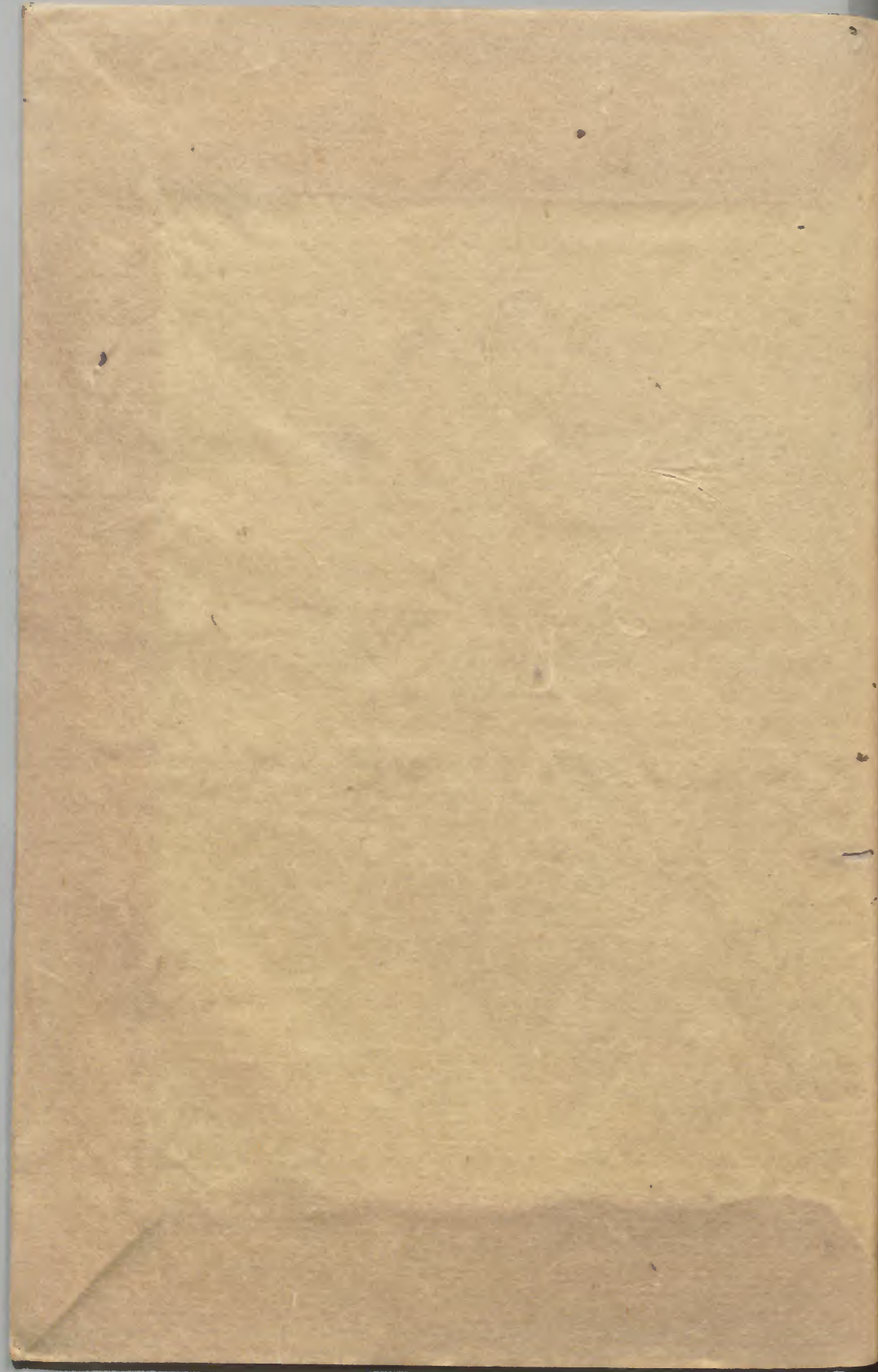
流の長き流に對して

流の長き流に對して

千利休

茶之湯百首

Faint background text on the left page, including the title '千利休 茶之湯百首' and various handwritten notes.



Handwritten text in vertical columns, written in a cursive style (sōsho). The text is faint and difficult to read, but appears to be organized into several columns. The rightmost column contains approximately 10 characters, while the leftmost column contains approximately 15 characters. The text is written in dark ink on aged paper.

